ai's view
藍の視点

徳島経済研究所
専務理事
里　正彦

# 経済研究所の考える県都のグランドデザイン

全国の都市を見渡しても、徳島市ほど都市の中心軸が長年にわたり不変であった街は珍しい。新町橋を中心に徳島駅と眉山に伸びる一本の軸。豊臣政権期の城下町形成から令和に至るまで、明治維新・鉄道開通・戦災を経ても、徳島市の賑わいや都市機能はこの軸の周辺に成り立ってきた。しかし、この中心軸の交通結節点としての機能が弱まりを見せた今、私たちはこの歴史ある中心市街地をどのように捉え直し、再構築していくべきなのだろうか。

当研究所では、2024年春・秋号および2025年春号の「人口減少を考える」、2025年秋号の「すてきな徳島」を通じ、人口減少の実態と県民の地域に対する認識について考察を重ねてきた。折しも今年、徳島市は中心市街地活性化基本計画の見直しを進め、経済5団体もまちづくりに関する提言を取りまとめる動きを見せている。今号では、これまで当研究所が積み上げてきた論考の延長線上に立ち、県都の将来像について論考を深めた。

特集にあたっては、これまでの歴史的な推移や客観的な統計データに加え、県民へのアンケート結果を踏まえて分析を行った。そのうえで、目指すべき街の姿を全体像とエリア別に分けて描き出すとともに、今後の市内交通のあり方についても提示し、これからの中心市街地をどうすべきか、という我々の考えをお示ししている。

また、今号の巻頭対談では、地方創生の先進地として知られる神山町のまちづくりを取り上げた。どのような考えのもとで、議論を深め、実行に移し、情報を届け、「可能性が感じられる」まちを創ってきたのか。地域課題に挑むすべての人にとって、多くの気づきに溢れる対談となった。

本誌が、これからの県都のまちづくりに関する議論の「補助線」として、読者の皆さまにご活用いただければ幸いである。